

CAPNA

キャプナニュースレター47号



CAPNA 初代理事長を務めた祖父江文宏さんに関する本が2冊、相次いで出版されました。亡くなって4年。今もなお、祖父江さんの存在は多くの人の胸の中に息づいています。本の紹介は、4面をご覧ください。

Vol.

47

万博の成果を子どもたちのために

愛・地球博の跡地に、記念公園（モリコロパーク）が開園し、愛知県児童総合センター・愛知国際児童館もオープンしました。その記念事業「子育て・子育て県民のつどい」が7月14、15日、同公園一帯とウィルあいちで開かれました。

万博のために長く休館していた児童総合センターも、新たな遊びと学びのアイデアを取り入れてお目見え。地元の小学生ら多くの子どもたちが、神田知事らと一緒にゲームを楽しむなどして再オープンの記念行事を盛り上げました。「子育て・子育て県民のつどい」の実行委員長は、CAPNA理事の白石淑江・同期大教授。「子どもが主役」の思いが隅々まで行き届いていました。続いて行われた「子育て支援全国サミット」では各地のさまざまな子育て支援の取り組みが紹介されました。また、ウィルあいちでのイベント「子ども・子育て応援コラボ」では、CAPNAは虐待防止の分科会を担当し、「子どもに関わる大人のエンパワメント」をテーマにCAPNAスタッフが電話相談の状況を報告しました。

続いて手塚千砂子さんによる「自己尊重のワークショップ」が行われました。親をはじめ、子育てにかかわる人たち、社会のすべてのおとなたちが、自分の命や人生に誇りをもち、愛と希望を持って生きることで子どもたちは幸せに育っていきます。愛・地球博で多くの人たちが感じた「子どもたちのための未来づくり」の思いを、つむぎ続けていきたいものです。

Book紹介

祖父江文宏・CAPNA 初代理事長にちなんで2冊の本です。購入をご希望の方は、事務局までTELまたはFAXでお申込みください。

あなたが笑うと私はしあわせになる

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち発行
祖父江文宏 追悼文集 2000円

「わがままなひと」「お茶目な人」「怒りの人」などなど、一人ひとりが前理事長、祖父江文宏に対する思い、そして心に刻まれた思い出を語っています。それらの言葉の行間に漂う祖父江への愛情は皆一様に暖かく穏やかで、本人を知っている方はもちろんのこと。知らない方も心温まる、素敵に一冊に仕上がりました。ぜひお読みください。

「小さい人」を救えない国 ニッポン

小林ゆう子著、ホブソ社、本体価格1400円

疎開先でのいじめ、死にかけたところを救ってくれたおじさん、やんちゃな少年時代、演劇青年の日々、保育園の保父、児童養護施設の「園長すけ」として子どもたちの心の傷と向かい合う日々、CAPNAの創設、闘病...62年の人生を、フリーライターの筆者が、関係者の声や資料などをもとにつづっていきます。力作です。

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。
(2-7月分、順不同、敬称略)

- 【団体】国際ソロプチミスト名古屋、ひと組、ほか匿名1社
- 【個人】服部恵子、的場定美、服部高子、後藤宗理、石田佳子、平野陽子、岡本洋子、辻本恵子、宮本ふみ子、吉田由美、藤井宣行、金子範子、萬屋育子、山本孝子、若林真由美、横井歩 ほか匿名8名

CAPNAニュースレター47号 (隔月刊31号)

2006年8月10日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

良き支援者になるために！

CAPNA が事務局を務める日本子どもの虐待防止民間ネットワークの第4回大会が6月3、4日、名古屋市のKKRホテル名古屋で開かれ、全国各地のNPO関係者が学び合い、交流しました。今回の記念講演は、浜松市の精神科医白川美也子さんの「性的虐待からの回復と援助」。中身のたっぷり詰まった講演の中から、白川さんたちの先進的な取り組みと、支援者の心構えの部分に絞って、要旨をお届けします。

白川美也子さん講演から

私は、1997年から天竜病院で性暴力被害患者の診察を始めました。翌年、性被害・性的虐待のグループを立ち上げ、その翌年からDV、性虐待、子どもの患者が増えました。2000年から児童病棟でPTSDの治療を開始。2001年には、DV防止法が成立し、静岡県犯罪被害者支援センターが設立され、成人病棟を立ち上げて、医師3人の体制でグループ療法に取り組むようになり、患者数が急増しました。現在は、子ども35人、成人25人ほどの入院患者がいます。今は、行政（精神保健福祉センター）の立場で、提供できるサービスについて模索しているところです。

心的外傷患者で小児病棟の入院者の内訳（2000年1月から2004年3月）をみると、私がみていた114のうち、虐待の被害者が74人（65%）で、うち家庭内性虐待は15人（13%）を占めていました。またDVの目撃は50人（44%）、家庭外の性被害は19人（12%）でした。この子たちの特徴は、虐待とDVの目撃の重複が多いということです。で、大人はどうかというと、心的外傷患者で成人病棟に入院した人179人。実はこの中に、虐待をしていたお母さんがたくさん入っています。虐待をしていて児童相談所で私のところへ面談に回ってきて、お話をする中で「実は私も」と話してくださった方で、衝動コントロールが困難だったり、フラッシュバックがひど



い方を入院治療していきました。その内訳は、小児期の虐待112人、うち家庭内性虐待10%、家庭外性虐待13%、性被害（レイプ）39%、DVにおける被害16%。やはり重複例が多いのですが、DVの目撃と児童虐待の重複—これは分かります。でも、DVの目撃だけをしていた子どもがなぜか家庭外の性被害にあって、そのうち長じてDVの被害にあって、そこで私たちのところを訪れてくる。DVを見ていたこと自体が、被害体験を重ねることにつながっている。あるいは、こうした家庭の子がネグレクト状態の中で家庭外性虐待を受けてしまうのか。そのあたりが実際には見えません。

システムを作ると、これだけたくさんの方が拾われてくる状況です。という中で、私たちはどう支援していくのか。よい支援者になる前提として「まず、傷つけることなかれ」。自分が親切だと思ふことが人を傷つけることは往々にしてありますから。

そして私、ある日、「そういえばきれいなものを見なくなったな」と気づいてハッとしたことがあります。歩いていて、ここ汚れてるなどか、そんなことばかり見えてしまう。自分の「代理被害」、自分が傷ついているんだと気づいて、それ以来、きれいなものを見つける、それを口に出すことを心がけています。それを始めて、少し体が軽くなってきました。

自分が重い気分だと、治療相手も重くなる。一緒に重くなってしまう。まず自分が人として何をされてあげられるのか、その感覚が大事です。そして自分の限界を知ること、自分を守ること。本当に大事だと思います。でなければ子どもを守れません。

身体的にも心理的にも法的にも、自分が傷ついたら、相手が傷つけたことになりますよね。そこをきちんとやっていくことが何よりも大事だと思います。

「虐待のトライアングル」ってご存知でしょうか。加害者、被害者、傍観者というトライアングルがあって、このうち「傍観者」は「救済者」とくるくる入れ替わりつたりします。こういうポジションのどれでも、中間に自分を置くことが、支援の基本なんです。

たとえば、電話相談で、ものすごく大変な子どもさんがいて、ずっと話を聞いているうち、「助けてあげるからね」と言ってしまったとします。「この子を救済しなければ」と抱え込んでしまったらその子も「救済されなければ」と被害者の立場になってしまう。でも、その子があるとき「助けてもらえなかった、ひどい」と感じたら、その途端に私たちは加害者になってしまう。このように、加害者、被害者、傍観者、救済者のどれかをやっていると、常に中心を踏み外している。常に「中心に行かぬば」と、立ち戻せる力を持つことがとても大事なんです。

危機介入とは何なのか。危機とは何かがブツンと切れた状態。大変なことが起きているわけです。だから、それに対応するには、適切な紹介ができなければならない、強い悲嘆、怒り、絶望に触れなければならない、話を聞く側も傷つくから、聞く側の体制づくりが必要になる。関与者がPTSDを発症することだってありえます。特に自分が被害体験がある方は多いです。

関与者による「分かち合い」の必要性があります。性虐待に関与すると誹謗中傷がつきもので、「巻き込まれている」とか「被害体験があるんじゃないの」などと言われることさえあります。それに気をつけ、自分の身を守る方法を持つことです。

「だれも一人で心的外傷に立ち向かうことはできない」とは、J・Lハーマーの言葉です。だから、連携して心の通じる仲間を持つことが大切です。そして「知識は力なり」。特に最近、私は法的な知識の足りなさを感じて、そこを補わなければと思っています。気持ちだけでは支援はできません。

そして精神医学的な立場から、子どもの心の理解。子どもの心で何が起きているのか、理解することです。